飢餓対策 NEWS　第 259 号　発行日 2012 年 2 月 20 日（毎月 20 日発行）定価 15 円

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry：略して JIFH）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、18 ヶ国 60 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

海外で活動を目指す方のために ハンガーゼロ・ファシリテーター・トレーニング（日程・金額変更）

（旧称 オリエンテーショントレーニング）

当機構を通して海外パートナーとともに活動を希望する方々や、国際協力に関心をお持ちの方々のための学びと準備の機会です。ご参加お待ちしています。

日時：3 月 19 日㈪～ 22 日㈭
会場：東京基督教大学 (TCU)
千葉県印西市内野
費用：25,000 円
（テキスト代 5,000 円を含む）
定員：12 名
お問い合わせは…
東京事務所☎ 03(3518) 0781
福地まで。

里子訪問ツアーのご案内 フィリピン・パリパラン地区

日程：5 月 18 日㈮～ 21 日㈪
参加費：10 万円

フィリピン・パリパラン地区の里子を訪問します。5 月 19 日には同地区のクロージングセレモニーに参加予定。詳しくは今後お知らせします。問い合わせは、大阪事務所まで。

書き損じはがきで国際協力

年賀状などの「書き損じはがき」をお送りください。書き損じはがきは、郵便局㈱が発行したもので未投函（消印のないもの）のものに限ります。海外スタッフを支えるために使います。

●訂正

本紙 1 月号に同封しました年次報告の決算報告の収入の円グラフの表示に誤りがありました。お詫びいたします。なお数字には誤りはありません。

ハンガーゼロ・サポーター大募集中！

今すぐ▶▶▶ 各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

□ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1 口 1,000 円）
□ チャイルド・サポーター（世界里親会）になりたいので説明書（申込書）を送ってください。
□ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1 口 1,000 円）
□ JIFH（日本国際飢餓対策機構）サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1 口 500 円）
□ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
□ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名：　　男・女

〒
フリガナ
住所：

（電話）

▼申込日：　　年　月　日▼

FAX・072-920-2155

ハンガーゼロ・サポーター　1817口。さらに運動をひろげていきましょう！

自販機設置でアフリカ支援 募金報告

ドリンク 1 本につき 10 円がアフリカの人々への支援金になる「ハンガーゼロ・アフリカ自販機」を設置しませんか？ドリンク 3 本分 30 円は、アフリカの人たちの一食分にあたります。

設置にあたり費用負担（毎月の電気代は必要です）はありません。ハンガー・ゼロのオリジナルデザインでも費用はゼロ。自販機前面にメッセージを表示できますので、多くの人に世界の飢餓の現状をお伝えすることができます。

昨年は、大阪事務所前と特別養護老人ホームのキングスガーデン三重など計 4 ヵ所に設置していただき、89,744 円の募金をいただきました。ご協力感謝します。なお他の、全国展開している有料老人ホームで、10 台ほど設置をしてくださる予定です。

ハンガー・ゼロ自販機設置のご相談は、日本国際飢餓対策機構 072-920 - 2225 まで

■発行者　岩橋竜介
■発行所　一般財団法人　日本国際飢餓対策機構
Web サイトアドレス　http://www.jifh.org/
e メールアドレス　general@jifh.org
■募金方法　※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウエブサイトで
身近に便利になりました
●郵便振替　00170-9-68590 ／日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替●クレジット、デジタルコンビニ

大阪　〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
TEL (072)920-2225　FAX (072)920-2155
東京　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCC ビル 517 号室
TEL (03)3518-0781　FAX (03)3518-0782
愛知　〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F
TEL (052)731-8111　FAX (052)731-8114
広島　〒731-0103 広島市安佐南区緑井 2-21-23 201 号
TEL (082)831-1214　FAX (082)877-3961
沖縄　〒901-0156 那覇市田原3-8-1 ユリ香ハウス 201号
TEL (098)859-4585　FAX (098)859-4540
東北　〒980-0012 仙台市青葉区錦町1- 13- 6エマオ2階 E
TEL (022)217-4611　FAX (022)217-6651

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所（八尾市）、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さっています。

日本国際飢餓対策機構　2012 No.259　2

飢餓対策News

ボリビア・チャヤ地区ラクヨ高校で民族楽器を演奏する里子たち

「善隣共生」元年を願う

2012年はどんな年になるのか。誰もが不安を抱くことでしょう。昨年は東日本大震災で、死者･行方不明者が2万人近くにも及びました。また昨年自らの命を絶たれた方が3万513人おられたと先日警察庁の発表があり、1998年以降14年連続3万人を超えている現実があります。同時にその数の何倍もの家族や友人の心の痛みがあることを思うと、多くの悲しみがこの国を覆っていると感じます。私たちは、この日本に住む一人の隣人として、様々な痛みを負っておられる人々にこれからも寄り添い続け、愛を分かち合ってゆけるのかが問われてくるでしょう。

また、海外でも、特に東アフリカの大規模飢饉で飢餓にあえぐ人々や祖国を追われた多数のソマリア難民、また人権蹂躙や経済破綻、資源獲得の裏で虐げられる人々など、世界全体が痛んでおり、その声にならない呻きが聞こえています。だからこそ、この声にならない呻きに耳を傾け、私たち一人一人が「いかに生きるか」を真剣に考え行動すべき時です。

「善隣共生」、善き隣人となって、人々と共に生きる、これが今私たちに求められている「いかに生きるか」の姿です。呻きは心を静め集中しないと聞こえてきません。自分の必要や欲望に奔走していては聞き取れるものではないからです。今年は世界規模で「善隣共生元年」となることを願います。

善隣共生とは「分かち合う生き方」です。言葉を変えれば「身近な人々、世界の人々と共に生きる生き方を実践する」ことです。私たちは他者を愛し、他者の痛みを理解し、自分のこととして受け止めて行きたいのです。

数年前、筆者がバングラデシュのある里子の家を訪問したときのことです。彼の父親は心臓病と糖尿病を患い失業中、経済的に困難な中、14歳の彼は里親の支援で学校へ行っていました。彼に将来の夢を聞きました。すると「医者になりたい」と答えてくれました。なぜ?と聞くと、「貧しい人たちが十分な治療を受けられずに困っている。僕はそんな貧しい人たちに仕えていきたい…」と答えてくれました。

物質的には裕福な日本に住んでいてさえ、貧しい人に仕えたいと思うことは難しいのに、貧困とその他の様々な困難の中にある彼が自分の利益ではなく、まず「貧しい人々に仕えたい」というのを聞き、感動と共に自分の心にある貧しさを思わされました。

私たちのこの手が、自分の身を装ったり、何かを掴み取ったりするだけでなく、自分の持てるものを、今必要としている人々に、世界の人々に分かち合って生きる、「善隣共生」の生き方を実践したいのです。

「受けるよりも与えるほうが幸いである。」（聖書）

日本国際飢餓対策機構　啓発総主事　田村治郎

1 分間に 17 人（うち 12 人が子ども）･1 日に 2 万 5 千人･1 年間では約 1,000 万人が、飢えのために生命を失っています。

ハンガーゼロ・サポーター募集！

ハンガーゼロ・アフリカは現在、とくに東西アフリカの緊急的な食糧の必要に応えています。

南スーダン・ルンベック地区

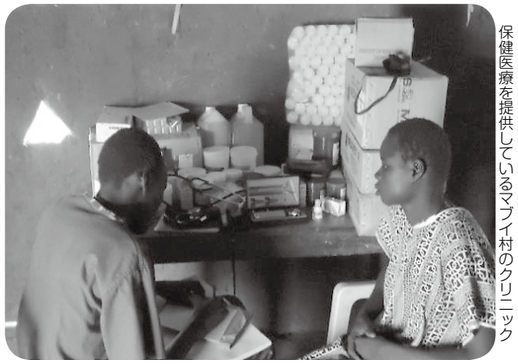
「子どもに給食と教育支援を！」

20年以上続いた内戦の後、昨年７月に独立した南スーダンは、近年東アフリカ各地に影響を及ぼしている天候不順による不作に加え、内戦と独立後の混乱、増加を続ける国内避難民の影響で穀物価格が高騰し、食糧の入手が困難な状況が続いています。この状況は３月末に向けてさらに悪化し、南スーダンだけでも250－300万人が食糧を得ることが困難になることが予測されています。１月には日本の自衛隊もPKO活動のために首都ジュバに到着したことが広く報道されていますが、マブイ村のようにもともと慢性的な貧困と食糧不足に悩まされてきた地方の農村部では内戦のため農地が荒廃し、都市部よりもさらに困難な状況にあります。

マブイ村の学校の子ども

給食支援活動の成果

日本国際飢餓対策機構は南スーダン・ルンベック地区マブイ村で2010年から現地協力団体、ライフ・イン・アバンダンス・南スーダンとともに子どもたちへの給食支援活動を継続してきました。当初110人の子どもたちを対象としていた給食支援は独立前後の混乱の中も続けられ、現在は250人が支援を受けながら学んでいます。学校の敷地では地域の自立に向け、穀物（メイズ、豆、など）や野菜の栽培もはじまり、収穫は給食に活用されています。


保健医療を提供しているマブイ村のクリニック

また子どもたちとコミュニティーの人々に基本的な保健医療を提供するクリニックも運営され、雨季でも勉強ができるように校舎も修復されました。日本国際飢餓対策機構は、20年以上続いた「世界最悪の人道危機」と国連がいう内戦からの復興、飢餓と貧困からの自立を目指す人々の応援を続けていきます。

平和な日本に住む私たちには想像もできない内戦、飢餓、貧困、独立という苦難を乗り越え、立ち上がろうとする方々のための働きにぜひご協力とご支援をよろしくお願い致します。

●南スーダンの子どもを応援するハンガーゼロ・サポーターを募集しています。郵便、銀行、クレジットカードも利用可

フィリピン、ミンダナオ島カパタガン地域で
はじめての世界里親会クリスマス

世界里親会ミンダナオでは、2011年12月15日に初めてのクリスマス会を行いました。

最初にローデル牧師による礼拝があり、次に里親会のスタッフがイエス・キリストの誕生日のお話をしました。またボランティアや教師たちと一緒に、学年ごとに歌やダンスを披露しました。そしておいしいランチを準備しました。にわとりや大きな豚を使ったさまざまなご馳走が並び、みんなとても満足しました。

楽しいゲーム

昼食後は楽しいゲームとたくさんの賞品を用意し、生徒たちだけではなく先生や保護者のみなさんもとても喜んで、「こんな楽しいパーティーは初めてです！」と言って感謝していました。

コミュニティーのみなさん全員に代わって、私からもJIFHと里親のみなさんに心からお礼を申し上げます。皆さまに神様から豊かな祝福がありますように。

（ミンダナオ　世界里親会担当　キム・ジョンフム）

おいしいランチ

●世界里親会では、チャイルド・サポーターを募集しています。詳しくは大阪事務所までお問い合わせください。

多くの青年が社会で活躍中

～ボリビア・チャヤの支援終了に思う～

ボリビア多民族国　駐在　小西小百合

昨年（2011年）末をもって、コチャバンバ州、アンデス山脈の標高4,000m以上に位置するタパカリ郡チャヤにおいての、12年間に及ぶ世界里親会の働きが終了しました。

私がチャヤに赴任した時から、寒さと高山病との闘いがあり、異文化の中でボリビア人同労者たちとの共同生活・仕事をしていく中での葛藤、地域の人々との関係作りの難しさ、思いを込めて家庭訪問し、家族全体の問題の相談にのり、また励ましてきた里子が学校をやめて街へ働きに行ったときの悲しみ。しかし親の言うことを聞かず学校へも行かずに過ごしてきた子どもに同労者とともに関わり、その子の心が変えられて就学復帰した時、また長年里子登録を待ち望んでいた女の子がやっと里子になることが出来、大喜びで子どもリーダー会に出席したのを見た時の喜び。父親も仕事も失い家族関係が崩壊して失意の中にあった青年（元里子）を祈りと助言、具体的な支援をもって励ます中で、彼が将来に希望を見出し家族関係が回復し、やりがいのある仕事につくことが出来たときの喜び。そしてFHの奨学生だった青年と学校寮で共に働き、彼の成長に伴って彼をFHチャヤの同労者として迎えることが出来た時の喜びなど、様々な出来事が走馬灯のように思い出されます。

ボリビア駐在　小西小百合

一人ひとりが価値ある存在

FHの活動全般を振り返ると、12年前の1999年にJIFHが活動を開始したときチャヤ地域の中心地であるラクヨには小学校しかなく、女子教育が軽視され、また男子でさえ他の村々からは遠いためラクヨに通学できない状況でした。しかし世界里親会の活動を通してFHスタッフたちが“女子も男子も一人ひとりが、神様に創られ愛され、大きな可能性を秘めている価値あるひとりなのだ”ということを伝え、保護者に子どもの教育の大切さを説明し続け、そして里子を含む子どもたちには勉強するように励まし、訓練し続けました。そして村の人々、地域政府、FHが協力してタパカリ郡初めての学校給食プログラムを開始、ラクヨ高校を設立しました。また遠隔地の子どもの勉学支援と生活訓練のためにラクヨ学校寮を建設し、寮の運営と寮内農業プログラムも支援してきました。

新たな支援地のアサワニ地区の典型的な住居（標高3,250m）

最後のバトンを受け継いで

その12年間の活動の結実として女子の就学率が上がり、特に2010年度の高校卒業生17人中８人が女子だったことは、画期的でとても嬉しいことでした。また「人づくり」の働きの結実として、元里子やFHの訓練や奨学金を受けた青年が何人も社会で現在活躍中です。タパカリ郡政府の議員（女性）やチャヤ地域政府最高責任者（副郡長）、FH/JIFH支援地域担当スタッフ、また今年大学を卒業しソーシャルワーカーの資格取得予定の女性など、その他にも大勢活躍しています。彼らは一様に、チャヤで活動した歴代のJIFH海外スタッフ・清水美穂、藤倉恵子、河合朝子さんたちへの感謝を述べ、様々な思い出を語ってくれました。彼女たちが私の先に働いてきたからこそ、そのさまざまな活動のバトンを私が受け取り、４年後にチャヤで活動の終了を迎えることができたことを感謝しています。またチャヤの子どもたちの里親様、そして私の活動を今まで祈りと支援金で支えて下さった支援者の方々お一人おひとりに心から感謝しています。

大きな困難が予想される新地域

さて、すでに今年１月から二ヵ所の新支援地域での活動が始まっています。その一つ、同じ高地にあるアサワニ地域は、チャヤから車で１時間以上遠方のさらに不便かつ貧しい地域です。支援活動をするには様々な面で困難極まりないため、他のNGOも他国の国際飢餓対策機構もここでの活動を断念しました。しかし誰も活動したがらない、さらに多くの必要を抱えた地域だからこそ、私たちJIFHは現地の人々の必要に応える決心をさせて頂きました。またもう一ヵ所の他の郡に位置するリオカイネ地域も含めて、これらの村々では現在も多くの子どもたちが、支援して下さる里親様を待っている状態です。

チャヤでの最後のセレモニーで挨拶する小西小百合

一日も早く一人でも多くの子どもたちが世界里親会の活動に参加できるようにと願いつつ、今まで神様と皆様に支えられてきたこの働きを、これからも許される限り続けていきたい、そしてチャヤでなされたと同様に多くの実が結ばれるのを、いつか皆様と見させていただくことを期待しています。

新支援地域での活動がスタート「リオ　カイネ」「アサワニ」

279人の里子たちが支援を待っています

▶学校を卒業することが夢◀

【リオ　カイネ】

ここは標高が平均1,800mを超えるアンデス高地の岩の多い地域の一つで、都市コチャバンバから135㎞の距離にあります。人々はさつまいもやピーナツ、とうもろこし、レモンなどを栽培して生活しています。しかし現金収入がほとんどない上、深酒の習慣のある親が多く、母子家庭も少なくありません。住居はしっくいの壁にかわら屋根で、電気はきています。地域の中での交通手段は主としてロバやラバが使われています。

リオ カイネ地区の水源

学校は子どもたちが学べるような設備が整っていません。しかし小学校６年間、中学・高校の６年を終えることは子どもたちの夢であり、地域の誇りでもあります。

この地域では169人の子どもたちが、里親さんを待っています。

▶わずかな収入で暮らす◀

【アサワニ】

タパカリ郡にあるこの地域は、標高3,250mに位置し、都市コチャバンバから140㎞、車で３時間半のところにあります。人々はじゃがいもや豆、麦、とうもろこしなどの栽培、羊やロバ、にわとりなどの家禽生育を主な生業として生活しています。しかし収穫はわずかで、人々は都市に建築の手伝いなどの出稼ぎにでていますが収入は不安定です。経済的に苦しい家庭では子どもを学校に行かせることができません。

交通は、週一回町に行くトラックの便がありますが道路事情が悪く、特に雨期（12月から２月）には崖くずれなどで通行できなくなります。人々はしっくい壁の家に住み、トイレはありません。

この地域では110人の子どもたちが、里親さんを待っています。

支援のお問い合わせは大阪事務所
☎072（920）2225まで
ウエブでもお申し込みいただけます

▲子どものいる世帯に飲料水
福島に安心を届けるプロジェクトを支援
▼子どもたちに信州の野菜

東日本大震災 被災者支援レポート

放射能汚染問題により福島県内では、特に幼い子どもを持つ母親たちの間で水の安全性に対する不安が大きく広がっています。中には単なる心配事にとどまらず、放射能への恐怖や不安から「朝起きて呼吸が苦しい」「動悸がする」などの精神的症状を訴える人も増えています。

そこで、坪井永人氏（キリスト愛の福音教会牧師）は子どものいる家庭に「安心」を届けようと、ペットボトル入り飲料水を無償提供する「ＦＵＫＵＳＨＩＭＡいのちの水プロジェクト」を始動しました。

当機構もこのプロジェクトに賛同し、これまでに２回、約2,000本のペットボトルの水を飲料水を備蓄している倉庫に届けました。その際に、坪井牧師は次のように話しておられました。「まだまだ必要です。実際いくらあっても足りません。ここには１時間以上かけて車で取りに来られる方もおられます。私は、どのような人にも、制限をかけずに持っていけるだけの水を渡しています。それによって福島県の家庭の中に少しでも安心を届けられたらと願っています。」

この倉庫には12tの水を置くだけのスペースがあります。しかし、12月末に当機構スタッフが水を届けに行った際には２t分しか置いてありませんでした。まだまだ協力が必要です。今後も継続して、いのちの水プロジェクトを応援していく予定です。

飲料水の備蓄用倉庫の様子、右に坪井永人氏

福島向けの野菜を収穫している様子（ブログより転載）

地元産のものを食べることからの内部被ばくを心配して、食事を十分に取れずにいる親子がいることを、福島市内の教会牧師から聞いた長野県伊那聖書教会大杉至牧師は、「福島の農産物が危険かどうかは私には分からないが、現実に困っている人がいるなら」と支援を決意。「福島の子どもに信州の野菜を送るプロジェクト」が生まれました。

まず信州の規格外の青果や家庭菜園の収穫物の無償提供を教会員らに呼びかけ、チラシを配ることから始めました。伊那市内の農事組合法人や農家などが、ねぎやじゃがいも、小松菜などを提供、この活動に賛同した辰野町ボランティアセンターが、毎月曜日に教会に届けられる農産物の受け入れを始めました。また中野キリスト教会の広田信之牧師や諏訪郡富士見町の農家からも、協力を得ることができました。

長野からの野菜は、福島市聖十字架福音教会の布山真理子牧師のもとに送られ、そこから保育園・幼稚園や希望される家庭の食卓に届けられています。布山牧師は、「この活動が福島の農家の方を苦しめることになるかと思いますが、『分からないことが多いからこそ、せめて子どもたちには安全な物を食べさせたい』という親ごさんの気持ちはよくわかるので」と話しておられます。

福島県内の教会では、近隣の除染作業の手伝い、子どもたちの週末県外疎開プログラム、仮設住宅への物資配布など“いま”自分たちに出来ることをやっていこうと奮闘しています。

当機構は昨年10月から、この「福島の子どもに信州の野菜を送るプロジェクト」の送料の一部支援を始めています。

「福島の子どもに信州の野菜を送るプロジェクト」大杉至牧師（日本同盟基督教団　伊那聖書教会）
電話＆FAX　0265-72-5564
野菜プロジェクトブログ
http://yasaiproject.cocolog-nifty.com/blog/

韓国からヘオルンヌリが再来日!!
「希望のコンサート」で支援の輪

来る３月８日、東日本大震災の被災者とアフリカで飢餓に苦しむ人々を応援するために、韓国で人気の音楽グループのヘオルンヌリが来日し、1ヵ月間にわたり、東北と関東で「ヘオルンヌリ2012希望コンサート」が開催されます。同グループによるチャリティーコンサートは、2010年のハイチ大地震支援、2011年の東日本大震災支援に引き続き今回で３回目となります。

コンサートは、３月９日に福島県の在日大韓郡山教会コンサートを皮切りに、同18日まで宮城県内の仮設住宅やキリスト教会など東北被災地で開催。同20日以降は、東京、神奈川、埼玉、千葉など関東地区の主にキリスト教会などで開催されます。各コンサート会場では、募金活動が行われ、東北会場では東日本大震災支援、関東会場では、ハンガーゼロ・アフリカ支援がアピールされます。

ヘオルンヌリは、アコースティックを基にしたフォーク、カントリー、フォークロックをベースに、男女５人の混声ハーモニーをのせて、韓国では幅広い年齢層から支持を集めています。過去２回行われた日本公演では、賛美歌や韓国の伝統音楽、さらに日本の唱歌やポップスなど日本の曲も歌われ、大きな感動を与えていました。今回もとくに東北会場では、被災された方々を励ます機会になるものと期待しています。

このコンサートにご参加いただき、ぜひ東日本被災地とアフリカの人々に温かい応援をお願いいたします。

なお、コンサートの開催日程については、大阪事務所までお問い合わせください。また、ウエブサイトでも開催日程をお知らせいたします。

八尾市から当機構に感謝状
東日本大震災支援活動への協力

１月16日、当機構に田中誠太八尾市長（大阪府）から感謝状が贈呈されました。

この日、田中市長は「東日本大震災において、地元の皆さんがいち早く支援の手を広げてくださり、また市としての救援活動の取り組みにも協力して頂けましたことを感謝いたします。」と挨拶され、当機構を含め17団体に感謝状の贈呈がありました。

感謝状を手に田中市長と岩橋理事長㊨

大震災直後から、当機構が独自に調達した毛布や支援者から寄せられた食料や生活用品を被災地に送る準備をしている際、八尾市が市民や企業から集めた支援物資の輸送ルートを確保できないということを知り、協力を申し出させて頂きました。その結果、およそ16トン分の支援物資を仙台市、石巻市、気仙沼市、陸前高田市などで被災された方々に確実に届けることができました。

このたびの感謝状はひとえに被災地に募金や物資を送り、またボランティアとして（継続中）貢献を続けてくださった支援者の皆様に対してのものであります。皆さまのご協力を心から感謝致します。

●東日本緊急支援募金にご協力を　郵便振替 00170-9-68590 日本国際飢餓対策機構　記入欄に「東北地震」と明記